愛の夢

お気に入りのカラシ色のカーテンが、ドレスの裾のようにはためく音で目覚めた。

目覚めると言ってももうお昼前。昨夜もいろいろと作業していたらベッドに入るのは朝４時くらいになってしまった。朝６時に必ず愛犬がお腹のうえに飛び乗ってきて、私をじーっと見下ろすというご飯の催促があるのだが、頭を撫でて、会話して、お皿にドッグフードを入れるという一連の流れをほぼ無意識の中でやっているので、これは起きたうちに入らない。

その後もしっかり眠ってようやくちゃんと起きたこの日、ベッドの上で深呼吸するといつもと違う匂いがした。秋の匂いだ。山に囲まれた田舎に生まれ育つと、四季の匂いに敏感になる。網戸から風を入れて心地よく眠っている間に、どうやら季節は移ろったらしい。夏から秋のコントラストをもっと感じたいのだけれど、わたしの体感では、とある一日を境にいつも突然秋はやってくる。今年もその突然の訪問客のような秋を感じる事となった。

事前にこの日辺りで訪問しますよ～というような初秋の便りがたくさん届いていたはずなのだけれど、どうしてか毎年、準備ができずに迎えてしまう。冷え症には厳しいフローリングの冷たさに対抗するべく、毎年恒例のモコモコ靴下をクローゼットから引っ張り出す。寝癖頭のままパソコンの前に向かい、コーヒーを入れながら音楽を流す。

先日、ピアニストの清塚信也さんのコンサートに行った。しかも私が地元で一番好きなホールでの演奏。本格的なドイツ製のパイプオルガンが中央に神々しく設置され、照明の柔らかさと木造部分の暖かさが相まって神聖な空気を作り出すこの会場で、清塚さんが颯爽とステージ上に現れ間髪入れずにリストの「愛の夢」を奏で出した時には、一瞬息をするのを忘れてしまった。

コロナの影響で通常の４分の１程度になった観客席は、普段よりも残響が長く、それがまたより幻想的に感じて私は感動していた。薄靄のかかった小さな湖畔で、やがてその靄が少しづつ晴れていくさまを見届けるような、贅沢で優雅な時間が心に焼き付いてしまい、それ以来、毎日目覚めるとリストをかけている。

そんな「愛の夢」がこの日の匂いにぴったりだと感じながら、マグカップを抱えてボーッとした。壁に無造作に貼ってあるエゴン・シーレのポストカードに記された日付が目に入る。このポストカードの送り主は今頃どこで何をしているのかだなんて、この曲が考えさせる。過ぎ去りし日に思いを巡らせセンチメンタルになる哀愁旋風にきっとこの時期は多くの人が巻き込まれる。

久しぶりに付けたテレビのニュースでは悲しい知らせが飛び込んできた。

計画的に、俯瞰的に、良い歳をした大人としてしっかり歩んでいるはずだった未来は、いざ迎えてみると全くそんな理想とはかけ離れた、もっと泥臭くて優雅さのかけらもない、がむしゃらな日常だった。迷いながら歩みを進める全ての大人達は、色付いた木々から落ち葉が散る頃、ふと立ち止まり何を想うのだろう。

生き続けるというのは、生き延びるという事に近く、それは変化をし続ける事なのかも。手元に揃えた多くのものを、一つずつ捨てていくような。

まだまだ私には人生の味なんてものはよくわからない。気負いせず、頑張らず、ちょっと適当に、うちの愛犬みたいな感じで生きていきたいななんて。一丁前に人生について考えてる私は暇なのか。ところで、暇って最高だよね。うんうん。よくわからない終点で終わった私の脳内談義。

目も覚めて来た。
愛の夢の旋律がひたすらに美しくて脆い、そんなひととき。

azufeeling